部会活動報告　近現代史ゼミ部会

【第４期、第８回】2016・11・26　　前橋市総合福祉会館

なぜ太平洋戦争はとめられなかったのか　　内藤真治講師

はじめに

イギリスのオックスフォード辞典は、2016年を象徴する「今年の単語」に「ポスト・トゥルース（post-truth)」を選びました。意味は、「世論形成において、客観的事実が、感情や個人的信念に訴えるものより影響力を持たない状況」というもの。つまり、事実より個人的感情が勝つということ。イギリスのＥＵ離脱の国民投票やアメリカ大統領選挙の報道などで使われたものです。

政治や経済が安定していて、人々に余裕がある時には、事実にもとづく理性的な理屈が通用するけれど、社会の矛盾が激化した状況下では、個人の気分や感情が噴出して正当な理屈を押し潰してしまいがちです。正しい理論や言説が常に大衆に支持されるはずだなどという素朴な世界観では、現実をリアルに捉えることはできません。戦争や格差の拡大が世界規模で発生し、貧困や難民問題、テロなどが深刻化してくると、個人や民族の気分や感情を巧妙にコントロールする独裁者や政府が大衆に支持されるという現実の中で、どうしたらそれを止められるか、考える必要があると思います。講師の内藤真治さんは今回のゼミの案内文で、「“時代の気分”という魔物は、これからの日本を考えるうえでも大切なヒントになると思えるのですが…。」と書かれています。（近ゼミ・スタッフ　設楽春樹）

さて、ゼミの本題の報告です

気分や感情が時代を動かす

昭和の戦争は、日清、日露戦争と違って総力戦になる。前線だけでなく銃後、つまり国民生活のすべてを巻き込んでの総力戦になる。そのために、どうしても民衆動員が必要になる。つまり、国民の戦争を支持する感情、熱狂が必要になる。

1937（昭和 12）年の 7 月 7 日の盧溝橋事件をきっかけに日中全面戦争が始まる。翌 8 月 24 日には閣議で「国民精神総動員実施要綱」が決定され、「尽忠報国」「挙国一致」「堅忍持久」などのスローガンを掲げた国民精神総動員運動が開始された。

出征家庭の勤労奉仕、英霊の遺骨出迎え、傷痍軍人の慰問、消費節約、貯蓄奨励、国債応募、労使協力など、戦争遂行への国民の決意を固めさせるため、様々な行動や呼びかけが行われた。

１、「軍歌」の季節到来＝時代の気分

日中全面戦争のころから次々と軍歌が。

○「露営の歌」（37・8）
　⇒「勝ってくるぞと勇ましく…」

○「軍国の母」（37・8）
　⇒「生きて還ると思うなよ　白木の箱が届いたら　でかした我が子　あっぱれと　お前を母は褒めてやる…」

○「愛国行進曲」（37）
　⇒「見よ東海の空あけて　旭日高く輝けば」応募多数、レコード売り上げ 100 万枚

軍歌ではないが

○「兵隊さんよありがとう」（39）
　⇒「今日も学校へ行けるのは…お国のために戦った兵隊さんのおかげです…」

○「隣組」（40）
⇒「とんとんとんからりと隣組　格子をあければ顔なじみ…」✏相互扶助、助け合いを表面に出しながら、相互監視、密告奨励

禁止された歌

○「別れ船」（40）…厭戦的として禁止

○「湖畔の宿」（40）…感傷的として禁止

○「森の水車」（42）…敵性音楽として発禁

２、学者や言論人はどうしていたか

①勇気ある言論人も少数いたが

33・8　『信濃毎日新聞』主筆・桐生悠遊、軍の怒りをかい退社

37・4　弁護士・正木ひろし、個人雑誌『近きより』発刊、何度も発禁処分

38・2　石川達三『生きている兵隊』、発禁、起訴

②マスコミは本来の役割を果たせなかった

37・7　事変勃発で報道関係も「挙国一致」協力を約束⇒大本営発表報道になる

38・3　内務省警保局、雑誌社に対し特定の人物の原稿を掲載しないよう内示

44・2　毎日新聞記者・新名丈夫はその記事で東条の怒りをかい、懲罰召集

✏✏✏✏✏✏✏✏✏✏✏✏✏✏✏✏✏✏✏✏✏

いつの時代でも国民を熱狂させるには仕掛けが必要、とりわけメディアの働きが重要。

今の日本のメディアはどうか。圧力を受け、自己規制や忖度（そんたく）などという形で政権監視の役割を果たせなくなっている。

1月から、演劇『ザ・空気』（永井愛作・演出）が始まり、今の日本のジャーナリズムの萎縮、言論の封殺に切り込む。

✏✏✏✏✏✏✏✏✏✏✏✏✏✏✏✏✏✏✏✏✏

③学者グループも身動きできず

労農派学者グループ検挙（1937～38）

第一次人民戦線事件、第二次人民戦線事件

（３、４は省略）

５、陸・海軍は情勢をどうとらえ、どう判断していたか

①日本軍全体の傾向

◇いったん始まった戦争はやめられない。敵軍の力に気づいても戦線拡大、根拠のない期待で戦争継続。結果に責任はとらない。

◇対米戦争が危険な賭けであることを知っていた。しかし、内乱や革命の危険より戦争の危険を選んだ。国民の夥しい犠牲になんの痛みも感じない無責任さ。

徐州作戦（1938・4～5）

38年1月、日本政府（近衛内閣）は南京攻略後、「国民政府ヲ対手トセズ」と声明。参謀本部は当面は不拡大の方針だったが、現地軍はこの消極さに不満。3月に参謀本部作戦課長に就いた稲田正純は積極作戦が必要と考え、4月、大本営は徐州攻撃を現地軍に命令、不拡大方針は2か月足らずで変更された。5月、日本軍は徐州を占領したが、市街は無人で中国軍はいなかった。中国側は正面からの戦いを避ける遊撃作戦、持久戦に持ち込む戦法なのに、日本側はみずから交渉の道を閉ざし、一撃論も破たんして、終わりの見えない泥沼の戦いへと進んでゆく。

「徐州作戦」を立案した参謀本部、稲田正純作戦課長の話

「近衛さん（首相）…お上品で迫力がない…どうしたって軍がやるしかしょうがない…あとはもう武力戦しかありゃしないんだよ。戦争やめろたって…シナ事変をある一つの段階までもっていかにゃあいかんわけだ。」

②海軍は

◇海軍は戦争の限界を知っていた。しかし、それを強く主張することはなかった。

◇戦争しないで屈すると内乱、陸軍のクーデターが起きる。それを恐れる。

◇多額の建艦費を議会で認めさせていたので、今さら対米戦争に自信がないとは言えない。海軍のメンツが大事。

◇日露戦争の勝利が忘れられず、相も変らぬ大艦巨砲主義

◇海兵・海大の成績順位がついてまわる。卒業年次も絶対。後輩の提案は『時期尚早』で退ける。先輩のメンツが大事。

③陸軍は

◇ここで撤兵したらこれまでの努力が無駄になる。英霊に申し訳が立たぬ。

◇失敗から教訓を学ばない。ノモンハン事件敗北でも責任、反省、装備の改善なし。